
君へ... ~愛しい君~

畠野いよかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ…～愛しい君～

【ISBN】

N4364N

【作者名】

畠野いよかん

【あらすじ】

一難去つてまた一難

幾多の問題を乗り越え大切な幼なじみと結婚した美穂子

三人の気持ちが交差する中、無事結婚するまでの物語

「君へ…」の続編

岡野美穂子
おかのみほこ

短大を卒業後中小企業へ就職。 小学校からの幼なじみと今年結婚。

柏木薰
かじわぎかおる

高校卒業後、警備会社に就職。 努力が認められ後少しでチームのリーダーに。

沢田康之
さわだやすゆき

大学卒業後大学院へ。 研究室に入り研究を続ける大学院生。

「では誓いのキスを」

ベールを上げ誓いのキスを交わす。視線を合わせ微笑む二人。

参列者の大きな拍手が大聖堂を埋め尽くす。

参列者が待つ教会前。ウエディング姿の美穂子がブーケを空高く投げた。

結婚式からさかのぼること一年半前

病院の廊下を急ぐ康之と美穂子。一人の顔はこわばっている。

>カシワギカオル様 <

プレートをようやく見つけ病室へ駆け込む二人。

「薰！」 「薰ちゃん！」

「あ？」

そこにはベッドに起き上がり雑誌を手にしている薰。顔にはられたガーゼが痛々しい。

「何？一人ともそんな怖い顔してどうした？」

「どうした？つて…薰大丈夫なのか？」

「意識不明の重体つて聞いたけど…」

？？その日大学院の研究室で仕事をしていた康之は、たまたま通りかかった他の研究室のテレビから聞こえてきたニュースを耳にする。

『「J」で事故の一コースです。今日午後一時過ぎ、都内を走る幹線道路で、10tトラックと警備会社の車が衝突する事故がありました。トラックが道路にある障害物を避けた際、対向車線を走る警備会社の車が避けきれず一台は衝突した模様です。』

警備会社？確かに薰も警備会社だったよな

「ありや～「J」りやひどいわ」テレビを見ていた教授たちが腕を組みながら一コースを見ている。

康之は「ちょっと失礼します。」とその研究室に顔を出した。

「おお、相田君か。ひどい事故だよな。うんうん。」

『……尚、衝突された 警備会社の車に乗っていたヤマダコウタさんとカシワギカオルさんの二人は意識不明の重体で都内の病院へ搬送されました。』

.....。

カシワギカオル？

柏木薰？薰？

テレビには事故現場の様子が映し出され画面下には薰の名前と写真が出ている。

動搖した康之の手から研究用の資料がバサバサと落ちた。

「沢田くん？どうした」

怪訝そうな教授達に挨拶をし廊下を走りながら美穂子に電話をした。

？？「康之から電話もらって慌てて来たのに……」

一人の心配をよそに

「俺テレビに出たんだ。有名人じゃん！」

薰は笑いながら言った。。

「それでもスゴかつたぜ。」

まるで他人ごとのように話し始めた。

対向車線からトラックが向かってきて避ける間もなく衝突。薰たちの乗った車は一回転。

しかしさすが警備会社の車。車体は普通車よりも頑丈にできていた。奇跡的に運転していた上司は右手と肋骨骨折、薰は左足骨折と打ち身、顔の切り傷だけですんだ。

「診察した医者も、あんだけの事故にあつたのにこのくらいのケガですむなんて運がいいって。鍛え方が違いますねだってさ」

器具に吊された左足を見て「ニュースは大袈裟なんだよ。」と美穂子と康之をみて笑い飛ばした。

「でも本当に良かつた。心配したんだからね」

美穂子が安心したように言うと

「美穂子がキスしてくれればもっと早く治ると思うけど」と薰は美穂子の方を見て唇を突き出した。

「バカ！心配して損した！」

美穂子はフンッと怒つてみせると、親に状況を伝えるために病室を出た。

美穂子が見えなくなつた途端、薰は辛そうにベッドへ寄りかかった。

「おい、大丈夫か？」

「やつぱちょっとしんどいかも……」

薫は目をつむり眉間にしわを寄せて鈍い痛みに耐えていた。

「美穂子の前だからってあんまり無理すんなよ。」

呆れて康之がベッドの横に置いてある椅子に座り続けて言った。

「美穂子な、来る途中の車の中で泣いてたぞ。お前に万が一の事があつたらどうしようつて」

薫は目をつむり鈍痛に耐えながら「ごめん。迷惑掛けて悪いな」と言った。

多少痛みが緩んだのか「ふーっ」と息を吐き出し目を開けた薫に

「そうそう。美穂子を泣かせたからペナルティーな

と康之は冷たく宣告し冷やかすように笑つた。

「なんでだよ！？」

有り得ない言葉に薫が抗議した時「病室では騒がない！」と帰つてきた美穂子に一人は怒られた。

「美穂子ちゃんいつもごめんね」

着替えやタオルが入った袋を美穂子に渡す薫の母。

「いいよ。おばさんも仕事忙しいでしょ？」

病院、会社から帰る途中だし、ついでだよ」

事故から一週間が経ち、薫のリハビリも始まった。美穂子は会社を経営し忙しい薫の母親に変わつて一週間に一度は病院へ着替え等を持つて行つていた。

薫の回復力は予想以上に早くリハビリに通う条件付きで事故から2ヶ月後には退院した。

康之と美穂子はささやかな退院祝いをした。

会社の寮で一人暮らしだった薫だが、リハビリ中は身の回りの事を

するのに不便だつたため実家から会社へ行くという生活が続いた。リハビリにもしっかりと通り脅威の回復力をみせた薫は1ヶ月後には完全復活。仕事も元通りできるようになり以前よりもバリバリ仕事をこなしていった。

「俺と結婚しない?」

三人がよく行く行きつけの店で美穂子と薫の二人は食事をしていた。食後の「コーヒー」を飲んでいた時、薫が突然切り出した言葉。

「ブツ…突然なに? 薫ちゃんつたら……」

美穂子は「冗談でしょ?」というように笑いながら返した。

「俺、真剣なんだけど」

薫の真剣な眼差しにびきつとする

結婚。

美穂子だって結婚願望が無いわけではない。

ただ、そのうち誰かを好きになりその人と結婚するんだろうなとう漠然とした思いはあつた。

「…だつてあたし達付き合つてないし」

「必要に」コーヒーをかき混ぜ美穂子は言った。

「付き合つてからじやないとダメなの? これだけ長い間一緒にいるのに? 美穂子の事なら誰よりも何でも知ってるつもりだけど……」

「そんなの突然すごい」

「そのうち誰かを選ばなきやならないんだぞ……これが今の俺の気持ち。一応覚えておいて」

薫は最後に軽い言い方でこの話を終らせた。

「俺、美穂子にプロポーズした」
たまたま街であつた薫と康之は久しぶりに飲みに行くことにした。

「つてか、お前らつき合つてたの？」

酒を飲み料理をつまみながら康之が聞いた。

「いや。こんだけ付き合いが長いのに今更改めて付き合つて下さい
なんて言えないだろ。」

「まあ、それもそうだな」ビールのジョッキを片手に康之が答える。

「……康之はどう思つよ？」

康之は壁に寄りかかり

「うーん。美穂子を薫にとられるのはしゃくだな。だけど知らない
男にとられるのはもつとしゃくに障る。「
まるで父親みたいな言い方だ。

「かといって俺が美穂子を……つてのはまだ仕事も安定していないし
な……つてか、そういう相談を俺にするか？」

「お前しか相談できる相手がないだろ」

薫はジョッキの中身を飲み干す康之を見てそついた。

薫に言われた『結婚』といつ一文字が、まだまだ先だと思っていた
美穂子へ急に近寄ってきた。

「誰か好きな奴いるの？」

薫に聞かれた時なんの返事もできなかつた。

一年前、薫や康之は美穂子の事を好きだと黙ってくれた。美穂子は二人とも大切な人だと答えた。

好きな人…

薫の事も康之の事も好きだ。ずるいとは思うがそれが美穂子の正直な気持ちだった。

どちらも選べない。

でもこれから先、誰か一人を選ばなくては結婚なんてできない。2人と結婚なんてできる訳ないし、そんな事は美穂子が一番分かっている。

一応覚えておいてと言われたが…

どうしよう…

「忙しいのに」めんね。」

数日後、研究の為学校へ行つていた康之に電話をし相談にのつてもらう事にした。

コーヒーの香りが漂い静かに音楽が流れる心地よい店。康之を目の前にしてなんだか言いづらいが、美穂子は思い切つて口を開いた。
「あのね、… 薫ちゃんに結婚しないかって言われた…」
「うん、知ってる」

康之の返事に美穂子は驚いた。

「えっ？」

「この間、薰にも相談されたよ」

「康之はなんて答えたの？」

康之は薫に言った事をそのまま美穂子に話した。

「そりが…」

「美穂子が幸せなら俺はいいと思う。最終的に選ぶのは美穂子だよ。誰の意思でもない美穂子の意思で選ぶんだ」

約1ヶ月あまり悩んだ美穂子は自分の仕事が終わると、薫の仕事が終わる時間を見計らつて寮へ向つた。

寮に着きインターホンを押したが、薫はまだ帰つてきていないようだった。

仕方がなく寮の周りをウロウロしていると薫と同じ制服を着ている人に声を掛けられた。

「あっ、もしかして薫の？」

「あっ、はい」

「病院でよく見かけたからや。薫もうすぐ帰つてくるよ」

「なになに？」

「薫の？」

その人と話していると会社仲間の人気が集まってきた。

「おーい薫！彼女が待つてるぞー」

と大声で呼ぶ声がした。

周りの人と同じ制服姿の薫は、走るわけでもなく仲間と話しながら歩いてくると

「誰？なんだ美穂子か」と言った。

なんではないでしょう！

美穂子は心の中で思つた。

更に集まる仲間達。

「なに？ 薫の彼女？」

「薰には勿体ないんじゃねえ」

「幼なじみだよ。で何の用？」

薰は周りの同僚からの質問に鬱陶しそうに答え、美穂子にも質問した。

「あつと……えーと……」

「こんなところで「この間の結婚の話なんだけど」とは言えない。

「んじゃ、着替えたから部屋でいい？」

と口もる美穂子を連れ寮に向かって歩き出した。

「部屋に連れ込んで何する気だよー」

「薰のスケベー」

と仲間達が薰を茶化す。

「つむせーな、お前ら。早く帰れ！..」

薰達を茶化して楽しそうにする同僚達を薰はシッシッと追い払い、美穂子を連れてそつそつと歩き出した。

「入れよ」

案内された薰の部屋はワンルームだ。

荷物を届いけに来たことがあるが中に入るのは初めてだった。

「着替えるから、そちら辺に座つてて」

と田の前で着替えはじめた。

「ち、ちよつと」

慌てる美穂子に

「あ？ いいじゃん。俺と美穂子の仲なんだし。それともアキドキしちゃう？」とシャツを脱ぎながら薰が近づいてくる。

「バツバカ！早く着替えろ！」

薰を押し戻し美穂子はそっぽを向いた。

よつやく着替え終わった薰は「で、今日は？」と煙草をくわえながら美穂子に向かい合って座った。

なんと切り出したらいいのか分からぬ。

「うーんとね……あのね……」

「何？なに？」

煙草を吸いながら美穂子の言葉を待つ薰はピンともて「もしかしてこの間の話の？」と言つた。

見事に即ちられ赤面しながら頷く美穂子。

「で返事は？OK？それとも…NG？どうせ…」

目をキラキラとさせ矢継ぎ早に言われ

「もー…ちょっとは落ち着けっ」

美穂子に言われ薰は叱られた子犬のようにシュンとなつた。

改めて座り直し

「あたしで良かつたらもうつて……下さい」

恥ずかしくて顔が上げられずうつむいていたが、薰の反応がない。そつと顔を上げると薰もうつむいている。

「薰ちゃん？」

美穂子が声をかけると鼻をすする音がした。心配して顔を覗き込むと薰は泣いていた。

「な…なんで泣くの。普通泣くのって女の子の方じゃない？」

「ホッとしたらつい……つれしくて」

薰はつづむきながら鼻をすすり涙を指でぬぐった。

「薰ちゃんの泣き虫一つ」

「つむせー……」

三人の中で一番大きくなり外見はつっぱった感じなのに、中身は小さい頃からちつとも変わってない。

『泣き虫薰ちゃん』のままだった。

薰は顔を上げ、自分を覗き込む美穂子を抱きしめた。

「美穂子、ありがとう。大好きだ」

「薰ちゃん……」

タバコの匂いのする薰の広い胸に抱かれ美穂子は目を閉じた。

「薰ちゃん」

何度も名前を呼び両腕を背中にまわしきつく抱きついた。

頬に薰の手がそっと触れ美穂子が顔を上げると唇が触れた。
優しいキスの後、2人は見つめ合い再び唇が重なり今度は少し乱暴なキスを繰り返した。

2人の結婚の意志が決まった後はお互いの親へ挨拶し結婚の了承を得なければならない。
「そんな改まつた事いいんじゃない?」
「いや、ケジメだからさ…」

とこう事で次の日曜日、薰は美穂子の実家へ行く事になった。

報告当田。

「いや…改まって来るとやつぱ緊張するな」

しきりにネクタイを気にしする薫は余裕なさげな顔で言った。

その緊張ぶりに美穂子はクスクスと笑った。

「大丈夫よ。この間会つたばかりじゃない。いつもとおり『チーツス、おじさん』って言ってよ」

玄関に入る前に緊張している薫の背中をポンと叩いて緊張をほぐした。

「美穂子さんを下さい」

腕組みをし厳しい顔の美穂子の父親。

二人の間に不穏な空気が流れ長い沈黙が続いた。

薫は緊張しすぎて顔があげられない。

この間はなんだ?

汗が吹き出してくる。

長い長い沈黙のあと、美穂子の父は難しい顔をしたまま口を開いた。

「いいよ」

は?

あの間はなんだつたの? 薫は美穂子の父を見た。

「いや、なんて言おうかなって考えてたんだよ。初めから了承するつもりだったしダメだ！はなんかね～ってね、芸がないっていうか。かと言つて説教じみた事を言つてもな…つて」

父親はがははと笑つた。

ぐつたりと疲れる薰。

「つたく」

悪態付くと父に聞こえたらしく

「なんだ薰。文句があるなら美穂子はやらないぞ。」

「いや、マジ勘弁して」

さあさあ、早速喧嘩してないで乾杯しましょ」

美穂子の母親と美穂子が酒と食事を運んで来た。

テーブルにはごちそうが並べられさせやかな宴会が始まった。

その数日後、薰の両親にも挨拶をしに行つた。

「こんなのでいいの？美穂子ちゃんにはもつといい人がいるんじやない？」

薰の母親が言つた。

「そうそ。俺はてつきり康之と結婚するんだと思つてたんだけどな…」と薰父。

「おい！本人目の前になに言つてんだよ。一人だって『美穂子ちゃんが娘になつてくれたら嬉しいな』って言つてただろうが…うれしくないのかよ」

両親の言葉に呆れる薰。

「も～おじさんもおばさんも。あたしは薰ちゃんで充分よ」と美穂子は笑つて薰両親に言つた。

「俺で充分つて……。美穂子もかよ」
薰以外の三人で話が盛り上がる中、疎外感でがっくりと方を落とす
薰がいた。

後日2人は康之に結婚の報告をした。

「そうか、おめでとう。幸せにな」
「結婚してからも三人でつるんで」「いつ」「ああ。美穂子を幸せにしろよな。でも泣かせる様な事があつたら俺が奪いに行くからな！待つてろよ美穂子っ」「おい、この期におよんでは人の嫁を口説くなー上等じやねえか、受けて立つてやるよ」

お互いいやりとしながら拳を突き立てた。

「ちよつとー、あたし物じやないんだけど」「美穂子は一人に向かつて叫んだ。

「薰ちゃんのばか！」

結婚式を間近に控えたある日、ケンカをし美穂子は薰の部屋を飛び出した。

角を曲がった時美穂子は誰かとぶつかりそうになつた。

「おつと……」「すみません」

顔を伏せ相手に謝る美穂子。

「美穂子？」

顔をあげるとそこには、たまたま実家へ帰つてきていった康之の顔があつた。

「康之……」

「何？またケンカ？」

泣いている美穂子を家に上げ、お茶の入つたコップを渡し康之が聞いた。

美穂子は顔をあげずニコクンと頷く。

ため息をついた康之は美穂子の頭を撫でながら

「こんなに泣かせてばかりいる薫に美穂子を渡さなければよかつた。今更後悔してももう遅いけどな……。でも今だったらまだ間に合つか？何だったら俺が美穂子をもらおうか？」と美穂子の耳を見て言った。

その言葉に顔を上げた美穂子が何も言わず康之をみて「康之は美穂子を抱きしめた。

「……なんてな、ごめん。こんな時にこんなこと言つて。俺つて最低だな」

美穂子の頭を撫でながら悲しげに康之は言つた。

「康之からの連絡を受け薫が迎えに来た。

「美穂子帰るぞ」

「いや……」

「美穂子……」

押し問答を続けた二人だったが、仕事や式の事でピリピリしていた薫は「勝手にしろー！」とドアを思いつき閉め部屋を出て行つてしまつた。

玄関で靴をひっかけ出て行つとした薫は、振り向かずに後ろにい

る康之に

「ちょっと頭冷やしてくる。わりいけど美穂子を頼むわ」と言い出て行つた。

「やつぱりここか

子供の頃よく三人で遊んだ小さな公園のベンチに薫は座つていた。康之が隣に座り無言のまま煙草を差すと薫も無言で煙草を一本抜いた。火をつけ並んで煙をはいた。

「美穂子は？」

「家。一人になりたいって言つから……。美穂子、最近薫の気持ちが分からなってさ……」

「あー俺だつてわかんねえんだよ」

乱暴に煙草を踏みつけ、薫がもやもやした気持ちを吐き出した。
「これからは美穂子を支えてやらなきやつて思つて仕事も精一杯やつてんだけど、なんか気持ちだけが空回りばかりでよ」
頭をかきむしつて薫がつぶやく。

「それ渡すつもりだつたんだろ」

薫が両手で握つている箱を見て康之が言つた。

「お前らしさ一人揃つてマリッジブルーなんじゃないの？」

美穂子はともかく俺が？

康之が立ち去つた後薫はしばらくベンチに座つたまま考えた。

しづらしくすると、つむく薫の前に美穂子がやつてきた。

「結婚やめる？」

顔をあげずに薫が言つ。

無言の美穂子。

薫は髪をかきあげると顔をあげ美穂子の田を見て話し始めた。

「俺さチームリーダーになつてから美穂子を構つてやんなかった。結婚式の準備もお前に任せっきりで。仕事のストレスで美穂子に当たつたり…全然美穂子の気持ち考えなかつた」

美穂子も心の内にある不安を全て薫に吐露した。

「結婚にあたしだけ舞い上がり…薰ちゃんは全然嬉しそうに見えなかつた。本当にあたしと結婚したいの?って疑心暗鬼になつた」

「『めんな』立ち上がり美穂子を抱きしめる。

薰の胸の中で美穂子は小さく首をふつた。

「これ…遅くなつたけど」

ポケットから指輪が入つた箱を取り出し、美穂子の左手薬指にはめる。

「辛い思いをさせて悪かつた。この先もずっとずっと美穂子を愛してゐるから」

薰は美穂子に優しくキスをして強く抱きしめた。

数年後、美穂子は愛おしそうに大きなお腹をさすりながら話している。

「女の子だつたら美穂子のよつこ、男の子だつたら俺のよつこ…」

「美穂子に似た女の子は可愛いだろ?けど薰のような男の子?今から将来が不安だな」

康之が大真面目な顔で言つと美穂子は笑い薰は口をとがらせた。

「幸せか？」

「うん」

康之の問いに満面の笑みで返事を返した美穂子。

「康之も早くいいお嫁さんもらいたいなよ」

「美穂子よりいい女なんてそういうないよ。今は研究が恋人かな？」

「うわっ…暗っ」

薰と美穂子は同時にいった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4364n/>

君へ…～愛しい君～

2010年10月9日10時23分発行